

「城を歩く会」11月定例会

バス見学会「上州・真田氏ゆかりの城をバスで訪ねる」 大河ドラマ「真田丸」ゆかりの「岩櫃城と名胡桃城」 を歩く

平成28年11月9日 山岸弘明

本日の主要行程

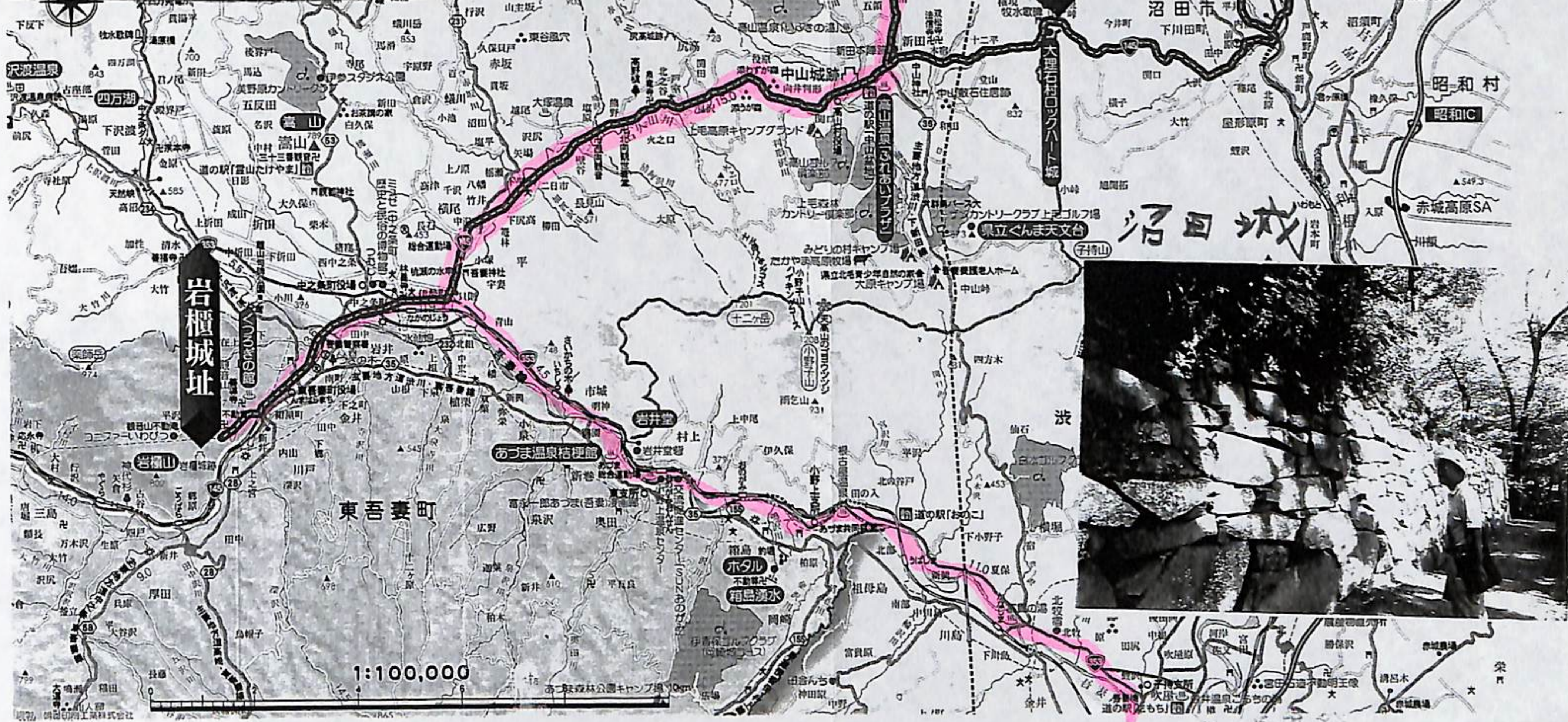
- 8時00分 JR池袋駅、西口公園集合、出発
- 10時30分~12時30分 岩櫃城見学（車中または案内所周辺で昼食）
- 13時30分~14時30分 名胡桃城見学
- 16時00分~16時30分 沼田城見学
- 往路を逆走
- 池袋駅着、解散

9時00分ころ

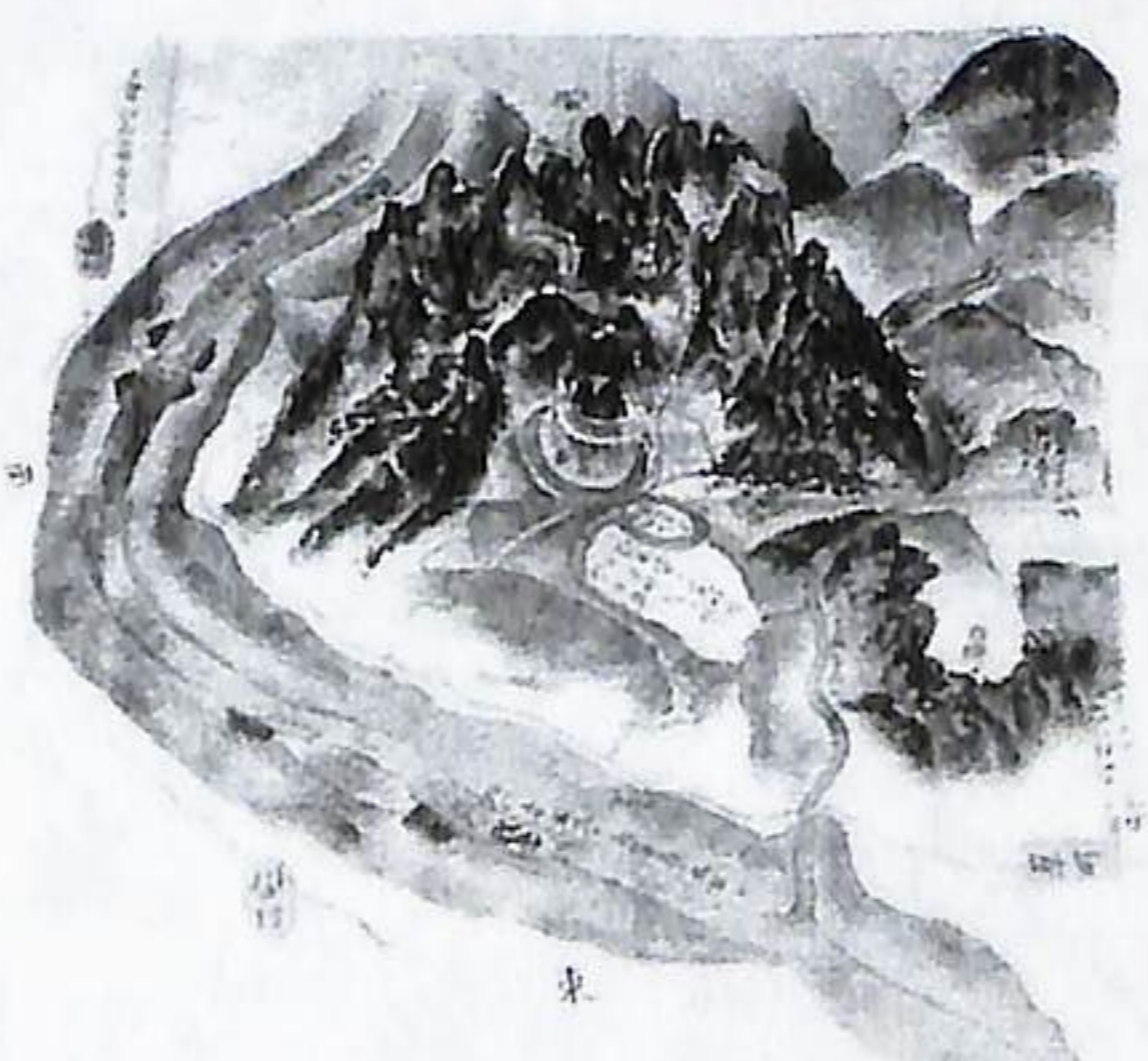
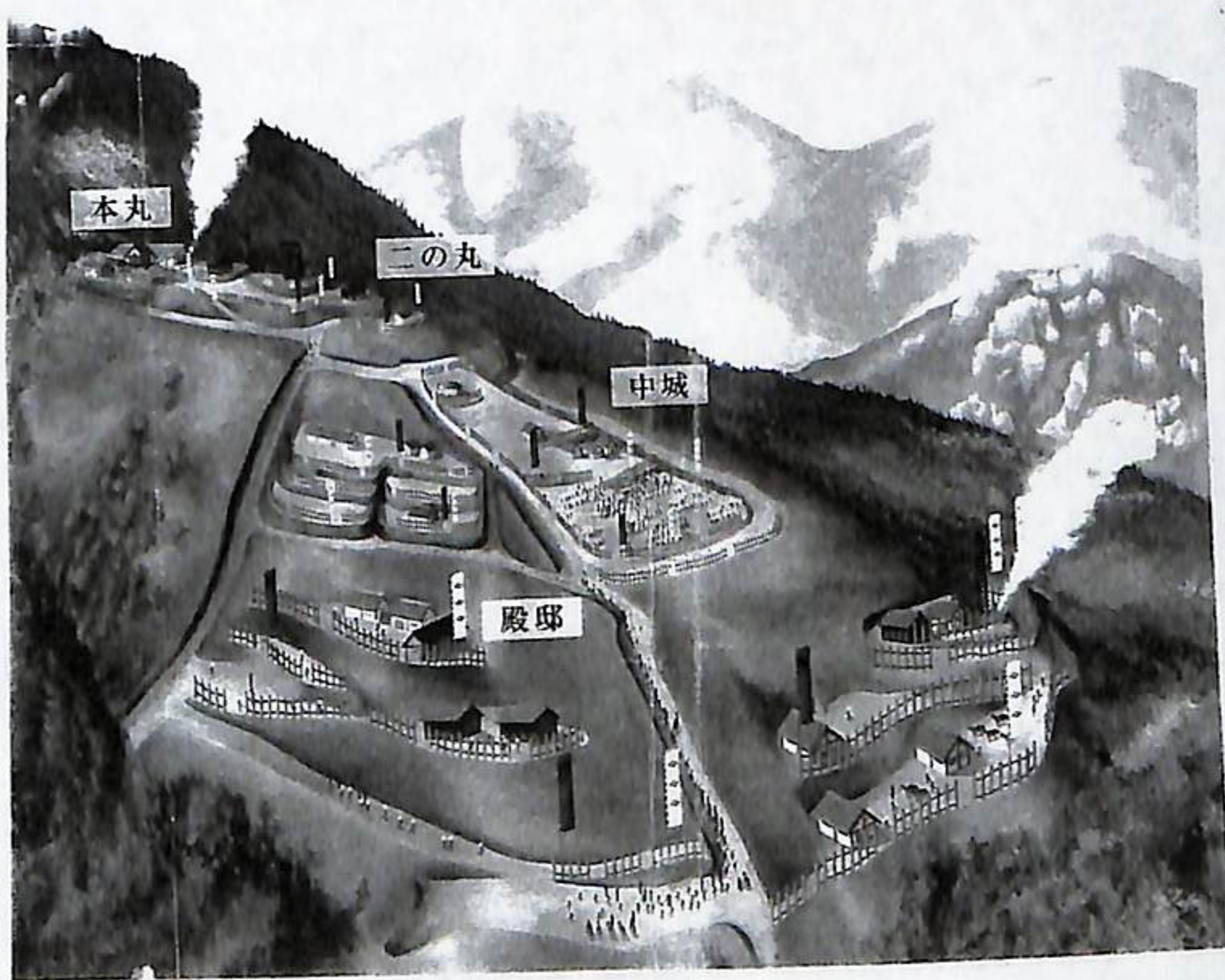
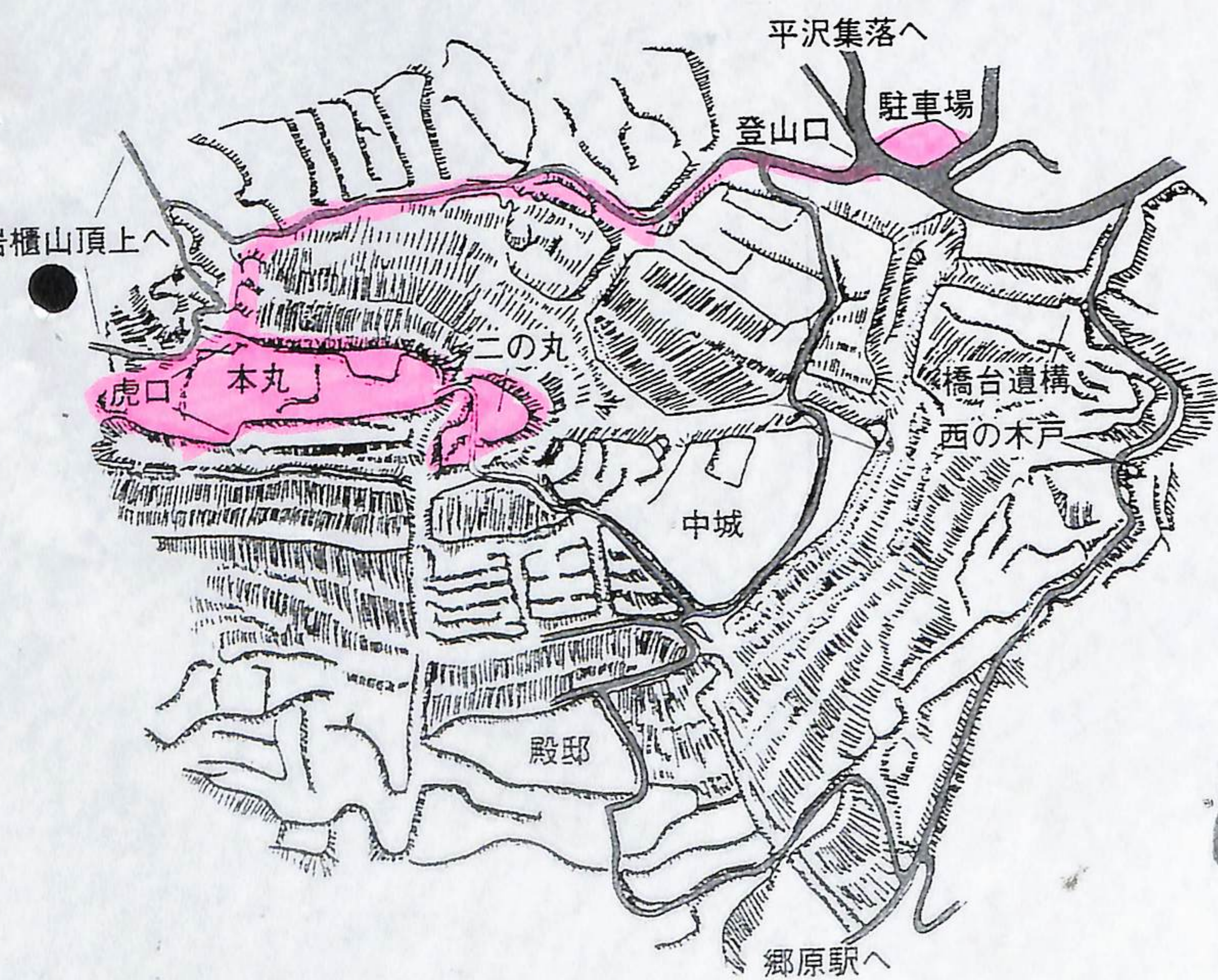
当面のスケジュール（詳細は「会報号外」を参照ください）
 12月2日（金曜） 冬の鎌倉を歩く「朝比奈切通し」と「金沢文庫」
 平成29年1月21日 「新年のつどい」
 2月休会、3月10日（金曜）、4月14日（金曜）=コースは未定



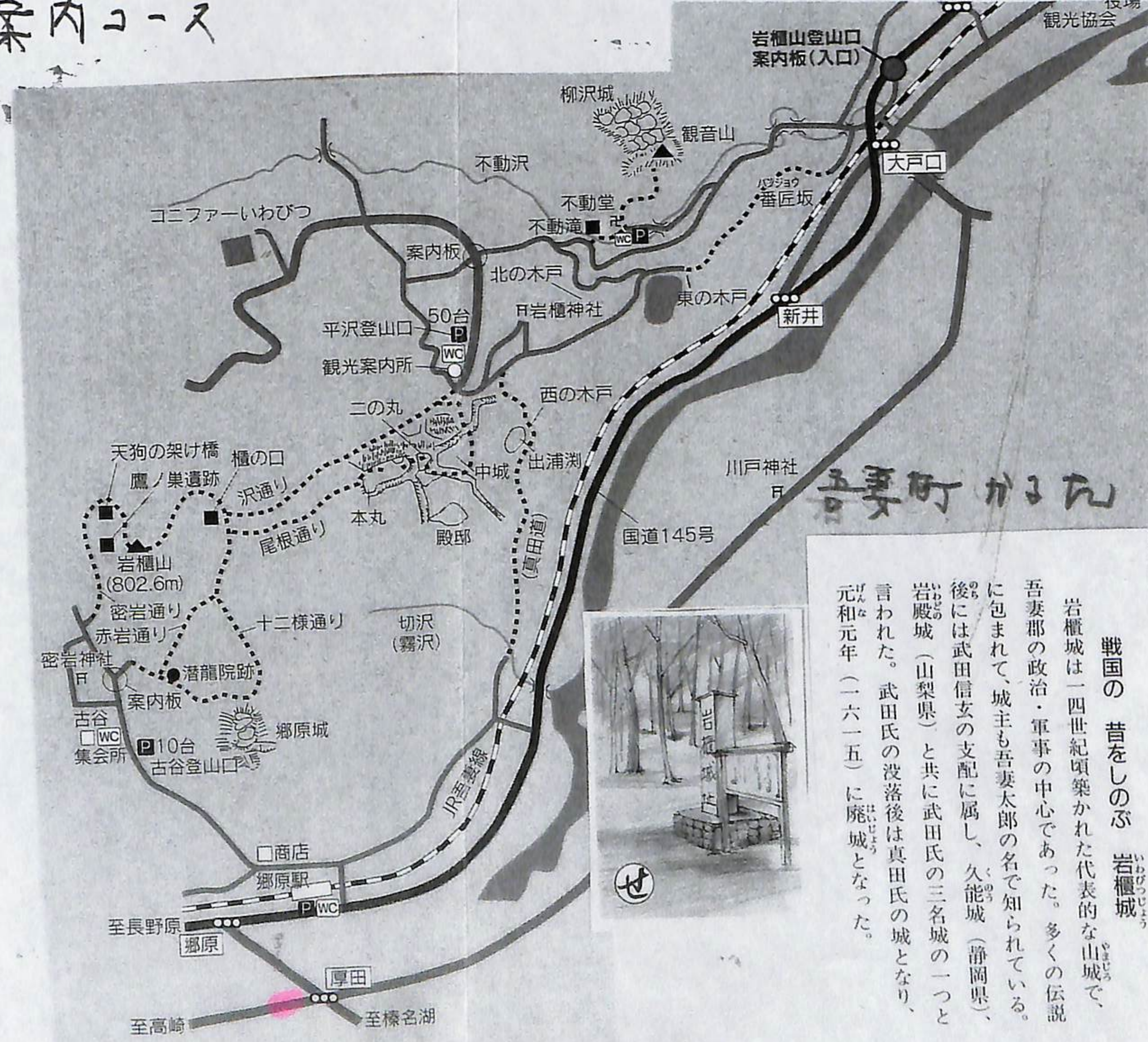
沼田城



本日の案内コース



岩櫃城
古絵図



戦国の昔をしのぶ 岩櫃城
 岩櫃城は一四世紀頃築かれた代表的な山城で、吾妻郡の政治・軍事の中心であった。多くの伝説に包まれて、城主も吾妻太郎の名で知られている。後には武田信玄の支配に属し、久能城（静岡県）、岩殿城（山梨県）と共に武田氏の三名城の一つと言われた。武田氏の没落後は真田氏の城となり、元和元年（一六一五）に廃城となった。

「天険の要害」岩櫃城を歩く

1) 海野氏分れの小豪族～真田氏の出自

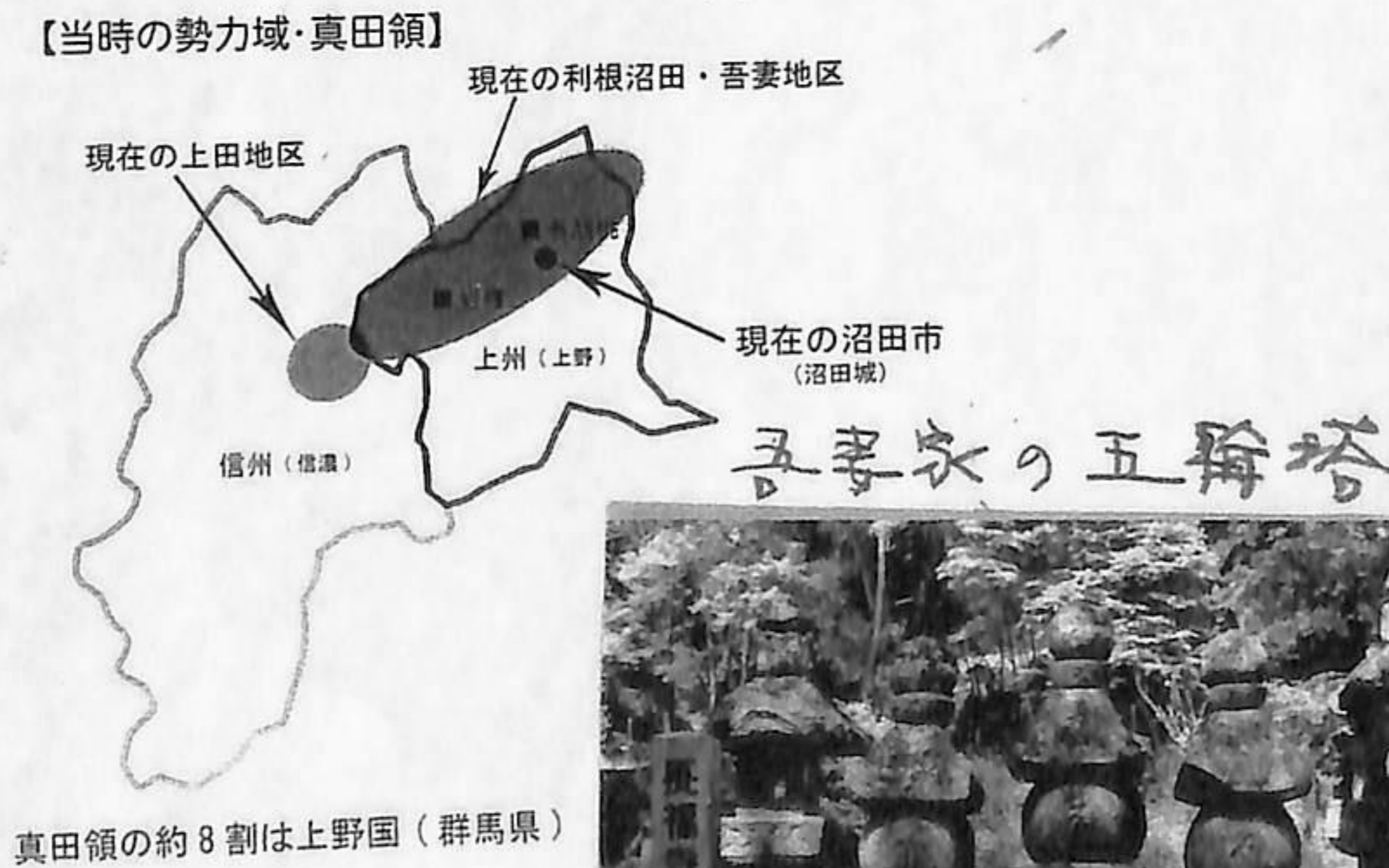
- ①清和源氏滋野姓、信州の小県（ちいさがた）郡海野郷を本拠とした豪族・海野氏の分れで、名字の地は小県郡の真田荘であった。
- ②幸隆が武田信玄の父・信虎に攻められ真田荘を追われるが、信玄に属して旧領を回復、以後武田氏家臣として小県郡一帯に勢力をもつ「国衆」となった。幸隆には3人の男子がいたが、信玄没後、天正3年の「長篠の戦い」で長男、次男が戦死、3男の昌幸が家督を継ぐことになる。

2) 新府城から岩櫃城へ脱出～大河ドラマ「真田丸」のプロローグ

- ①昌幸は幼きより人質として甲府・躑躅が崎館に住んだ。信玄に認められて一族・武藤氏の名跡を名乗る重臣になった。昌幸は勝頼の命で新府城を築城、武田氏は躑躅が崎館から本拠を移す。天正10年織田信長軍が攻め寄せると、大軍を前に戦意を喪失した勝頼は城に火を放ち岩櫃城に落ち延びようとするが、進退に窮し田野の山中において自害、武田氏は滅亡した。
- ②この時昌幸の母・とり、正室・薫、長男信幸（信之）次男信繁（幸村）らの家族は新府城にあった。大河ドラマ「真田丸」は「天目山の戦い」武田家の滅亡と、残された昌幸家族一行の岩櫃城への「脱出行」から始まる。

3) 真田幸隆築城か～謎多い岩櫃城の築城

- ①通説は南北朝時代吾妻氏創建、またその子孫齊藤氏築城とする。しかし近年、齊藤氏の本拠は岩櫃城の西方3kmの岩下城で、武田氏に敗れた後、一部残党が嶽山城に籠って抵抗した。岩櫃城はこの嶽山城に対抗するために築かれたという説も出て、説得力がある。だとすれば永禄7年ころ武田信玄、家臣・真田幸隆築城ということになる。
- ②岩櫃城は信玄の「上州経略」拠点城で、関東と越後を結ぶ要路・沼田に近いことから上杉謙信の動向を甲斐本国に伝達する使命を帯びていた。天正6年謙信が没すると、春日山城で後継をめぐる「御館の乱」が起こり、上杉景勝は武田氏と「甲越同盟」を結んだ。
- ③信玄はこれにより一気に「北上州」への勢力拡大を図る。上州の経営を任された昌幸の当面の敵は小田原の北条氏政となった。氏政は上杉家の内紛の間に上州に攻め入り、沼田地区を占拠していた。昌幸は北条沼田領の城主たちを懐柔しながら激しい戦闘を仕掛け、天正8年沼田城を無血開城させた。昌隆は上田から岩櫃、沼田にかけてのいわゆる「真田街道」を掌握、武田氏の家臣の一方で「戦国大名」として自立性を高めていくことになる。



4) 吾妻川対岸から霊峰・岩櫃山を遠望～大河ドラマをほうふつ

- ①バスは「関越自動車道」渋川・伊香保インターから14号線を最初の見学地「岩櫃城」をめざす。信州上田から上州沼田に通ずる「真田街道」で、山並みは中国「南画」を連想する岩山にかわる。
- ②いったん「岩櫃山登山口」を通り過ぎ、「郷原駅」吾妻川対岸から岩櫃山をのぞむ。奇岩が覆い被さるように並び立つ絶好のロケーション、「大河ドラマ」のタイトルバックそのものだ。
- ③岩櫃山は往古から「霊山」として信仰された。標高802m、「吾妻八景」を代表する景観で、南面はおよそ200mの絶壁。岩櫃城は右肩だがやや裏側でここからは見えない。城地から山頂まで急坂30分ほど、距離は短い途中に「くさり場」が2か所、下見で行き合った女性は「思わず足がすくんだ」と語った。岩櫃城の「詰めの城」や「物見」と考えられるがきょうは遠望のみ。

5) 迂回してやさしい「沢通り道」を進む～岩櫃城夫手の守り

- ①改めて「岩櫃山・岩櫃城入口」から真田街道「番匠坂」を案内休憩所、観光駐車場めざす。大戸口＝城入口か。番匠＝工匠の意、城大工たちが居住か
柳沢城（観音山）＝支城（出丸）。真田街道に向かって飛び出した先端高所から敵軍を窺う不動坂、平沢地区＝城内に開かれた平地で、根小屋、非常時の集結地、城下が考えられる案内休憩所＝トイレ、自販機、案内VTR
- ②東吾妻町史跡看板＝岩櫃城跡、東吾妻町指定史跡
岩櫃城は岩櫃山の中腹東面に築かれた典型的な中世の山城であり、山頂より約200m低い場所に本丸、2の丸、中の丸があり、これらを中心に広い範囲で堅堀や曲輪が存在します。
岩櫃城はその起源や築城者については定かではありませんが、南北朝の時代に始めて岩櫃城主・吾妻太郎行盛の名前が登場します。行盛は南北方の豪族里見氏に攻められて自害し、その後行盛の子・憲行が関東管領上杉氏の支援によって岩櫃城を奪回し、齊藤越前守憲広（基国）まで6代にわたる東吾妻支配の本拠となりました。
戦国時代の上州は甲斐武田氏、越後上杉氏、小田原北条氏による支配権争いが繰り返され、永禄6年武田信玄の家臣であった真田幸隆の手によって落城し、武田氏の西上野支配が確立しました。幸隆の推挙により武田信玄から岩櫃城代に海野長門守幸光が命ぜられ、真田の先兵となり17年の長きにわたり吾妻の地を守りました。天正9年の海野兄弟誅殺の後、岩櫃城は昌幸の長男信幸を城代とし、信繁（幸村）がここで一時代を過ごしたといわれています。武田氏の滅亡後真田氏の支配となり、岩櫃城は信州上田城から上州沼田城を結ぶ真田道の間地点として重要な位置を占めました。徳川幕府開設後も吾妻地域は真田氏の支配となりましたが、徳川幕府の「一国一城令」にともない慶長20年ころ真田信幸は城下町を現在の原町に移し岩櫃城を破却し、岩櫃城、岩殿城、久能山城の三堅城といわれた岩櫃城も戦国時代の終焉とともにその役割を終えました。
- ③平沢ルートから登城開始。きょうは長い急坂を避け「沢通り」から「主郭（本丸）」をめざす。およそ15分、紅葉の「森林浴」を楽しみながら登る。



岩櫃城

6) 巨石武者走りから「横矢」が襲う～本丸内枡形右折れ

- ①「本丸跡分岐点」からは短い急坂。正面「高台」、主郭（以下本丸とする）をめざす。
- ②堅堀＝岩櫃城最大の特徴は「堅堀」である。縦方向の空堀で、攻め手兵士の斜面横移動阻止が目的、空堀は通路でもあるが城攻めでの直進は危険
史跡看板＝堅堀。この空堀も通路でここで「中城」からくる堅堀を受ける
- ③北虎口道＝虎口へのジグザグ道を登る。食い違い、平場（腰曲輪？）、堅堀堀底道の変化か
- ④北枡形虎口（からめて門か）＝「枡形」は方形の空間を持つ防御施設をいう。わずかな窪地に痕跡が窺える。正面に土塁跡。枡形右折れか。門形式は櫓門が考えられるが不詳
- ⑤右手頭上に巨岩。いまにも落ちそうだがコンクリート補強されているので大丈夫。
本丸虎口に「横矢」。攻め来る敵を巨石周辺から射掛ける。
- ⑥巨石から先が岩櫃山への「尾根通り道」、およそ30分で「天狗の蹴上げ石」「山頂」に達する。
仮に山頂を「詰め城」と考えれば、尾根通りは「武者走り」になる。下見で巨石先まで登ったが山容は見えなかった。

7) 信幸が支配し、幸村も青年期を過ごした～武田3名城の本丸

- ①岩櫃城の最大の特徴は山の「中腹」にあること。
山城は通常頂上に本丸を構えるが、この城は山頂「天険」への登り口に立地、長大な堅堀を駆使し、本丸を頂点にする独特の縄張りを画いている。
- ②本丸と南虎口＝本丸は東西140m、南北35mのほぼ台形で、周囲は切り岸した絶壁になっている。
東北側に櫓台とみられる30m四方ほどの櫓台がある。
- ③虎口は北虎口のほかに大手門に相当する南虎口。内枡形門で枡形跡窪地の下に平場、その下が2重空堀で上の道は2の丸からの堀底登城道。下の道は帯曲輪に相当する本丸防御ライン。南虎口も櫓門が想定されるが詳細は未詳である。
史跡看板＝本丸南枡形虎口
史跡看板＝腰曲輪。南枡形虎口と2の丸から本丸に上がる通路で、本丸、南面を守る曲輪。
- ④南側急ガケ斜面を見下ろす。林の切れ目から切沢地区、吾妻川が望める。岩櫃山中腹の断崖、厳しい自然立地を利用した「城の守り」を窺う。
- ⑤平成25年度「本丸跡発掘調査」によると戦国時代の表土まで深さ150cm（100cmほど埋め土か）、掘立柱跡、低い石垣と石段、鍛冶工房らしい遺跡を検出したが建造物としての確認にはいたっていないという。
- ⑥高台＝井楼櫓、物見台か。本丸周囲は柵列か。高台土塁から平沢口と南面の山々を望む。



本丸跡



中丸虎口



虎口より大手門
横矢



→ 本丸土塁

本丸、東吾妻町観光協会史跡看板＝岩櫃山由来記

吾妻八景を代表する岩櫃山の中腹東面にあるこの城は、年代は定かではありませんが、鎌倉時代の初期のころ、吾妻太郎助亮により築城されたといわれています。城郭の規模は1.4キロ㎡と上州最大規模を誇り、後に甲斐の岩殿城、駿河の久能城とならび武田領内の3名城と称されました。その後齊藤氏の支配するところとなり、永禄6年武田信玄は上州侵略のため、重臣・真田幸隆に岩櫃城攻略を命じました。ときの城主は齊藤基国（または憲広）といわれ堅城を利用して奮戦しましたが、ついに落城してしまいました。こうして岩櫃城は武田氏の（朱判）中に落ち、信玄は幸隆に吾妻郡の守備を命じました。天正2年に幸隆が世を去り、岩櫃城主には長子の信綱が収まりましたが、翌年長篠の戦いで信綱、昌輝兄弟が戦死したため、真田家は3男の昌幸が相続しました。その後、昌幸の長男信幸が支配し、信幸の弟幸村も少年時代をこの城で過ごしたといわれています。天正18年北条氏の滅亡により、信幸は初代沼田、岩櫃城は沼田城の支城として重臣出浦対馬守を城代としました。そして幾多のドラマの舞台となった岩櫃城も徳川家康が発した一国一城令により400余年の長い歴史を残し、その姿を消しました。

- ⑦史跡看板＝櫓台。主郭の中で一段高くなっている場所で巾12m、高さ2.5mほどの高台になっている。周囲を観察する櫓台と考えられ、ここから周囲の展望、状況を確認し、城内外に指揮、連絡系統を結んだとされる。

7) 城の中心点～4本の堅堀に囲まれた2の丸

- ①堀切り帯曲輪を超えると三角形をした2の曲輪に出る。もとは堀切りで本丸と遮断、大手道は前出、南虎口2重空堀の堀底道だが、遺構は土橋のようにみえる。
- ②2の丸は堅堀のターミナルになる。北斜面に堅堀が2本、南斜面にも2本、いずれも長夫で発掘調査で最大330mあった。堅堀は横方面の斜面移動を規制する。
- ③2の丸は小型だが、主郭部における兵の集結場であったと考えられる。
- ④いったん本丸高台に戻ってチーム再編、しっかりした靴、特別元気な人だけで、堀底道の中城へ降りる。急坂で危険なことからはほかの方は登り道に戻り、休憩所周辺で一足早くお弁当をどうぞ。
- ⑤堅堀は、現状2～3mの道幅だが、かつて上巾が5～6m、下幅30～40cmの薬研堀で雨が降ると水路になった。途中、堅堀の変化や「中城」跡などを見学して駐車場で合流する。

8) 武田勝頼を迎えようとした潜龍院跡～今回は見学しません

- ①殿邸＝地名から山裾御主殿が想定される。普段の居館で、家族が生活したものと考えられる。
- ②潜龍院跡＝天正10年3月、真田昌幸が敗走する勝頼の落ち先として急造された御殿跡。しかし勝頼は岩殿城を選んで天日山で自害したので実現することほなかった。



本丸堅堀の
吾妻川を眺望



潜龍院跡



堅堀

← 2の丸虎口の守り

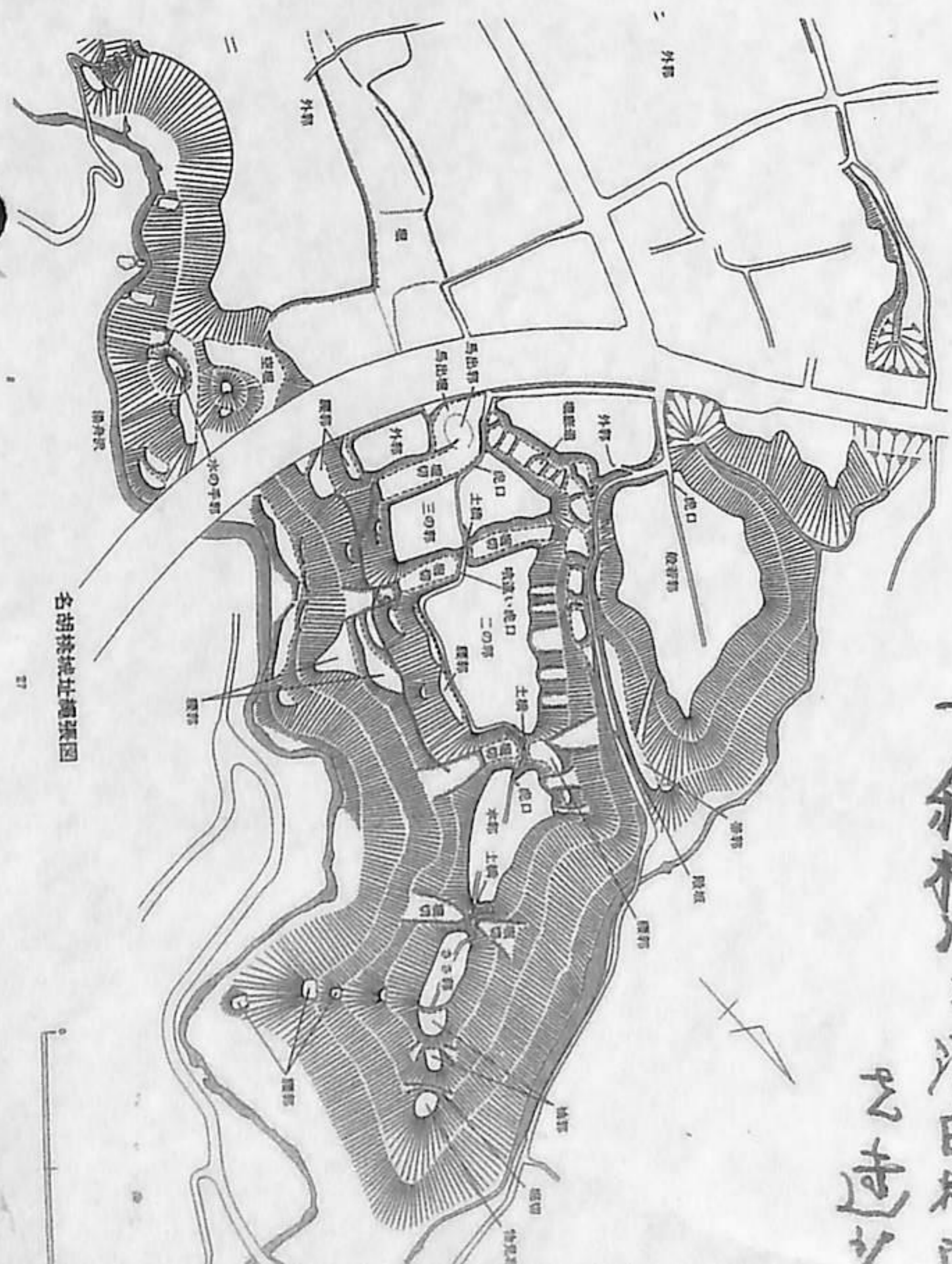
日本の歴史を動かした「名胡桃城」を歩く

1) 豊臣秀吉「天下統一」のきっかけを作った～「関東総無事令」と「名胡桃城事件」

- ① 当地伝承による名胡桃城の築城は、室町時代、沼田城主・沼田氏一族の名胡桃三郎が「般若郭」の地に館を築いたのが始まりとされる。
- ② 天文年間、沼田一族は越後の上杉謙信に属したが、天正6年謙信が春日山で急逝すると小田原の北条氏政が一気に上野に侵攻して沼田地区を手中に収めた。翌7年武田勝頼の命を受けた真田昌幸が信濃から吾妻、利根地方に進撃、名胡桃氏館を攻め落して「陣城」とした。沼田城の利根川対岸に迫った昌幸は、旧勢力「6人衆」を調略、「無血開城」、沼田氏も滅亡させた。
- ③ 天正10年武田氏は「天目山の戦い」に敗れ、以後、昌幸は独立した戦国大名として歩み出す。いったんは「天下統一」目前の織田信長に臣従するが、「本能寺の変」で横死し、秀吉が後継者と決まると、家康、秀吉に信幸、信繁2人の実子を人質として差し出した。
- ④ 「天下統一」をめざす秀吉は関白、太政大臣に進んで「関東総無事令」を発令、「紛争地域」であった北上州の調停に乗り出す。当時昌幸が領有していた沼田地区を分割、利根川を境に沼田城を含む3分の2を北条氏に与え、名胡桃城を含む3分の1を真田領とし、取り上げた分は後日真田氏に与える、というもので天正17年7月に実行された。
- ⑤ 沼田城と名胡桃城は利根川を挟んでわずか5km、互いに目障り、3か月後、沼田城代となった北条方の猪俣邦憲はこの裁定に逆らって名胡桃城を不法攻略した。
- ⑥ 名胡桃事件を知った秀吉は激怒、氏政、氏直父子に「宣戦布告」を行なうとともに全国の諸大名に「小田原征伐」を命令した。
- ⑦ 翌天正18年3月1日、秀吉は22万の大軍を率いて京都を進発、4月上旬には小田原城を完全包囲、籠城3か月「石垣山一夜城」の出現で戦意を喪失した北条氏は7月5日降伏、氏政と氏照が自刃し、高野山に追放された氏直もまもなく病死して北条氏は滅亡した。

2) 武田流「丸馬出し」が真田氏の城を物語る～本郭から沼田城下を俯瞰

- ① バスは国道145号線の「真田街道」、17号線、およそ1時間で名胡桃城に到着する。最寄り駅は上越新幹線「上毛高原駅」、上越線「後関駅」、関越自動車道は「月夜野インター」、ともに車7



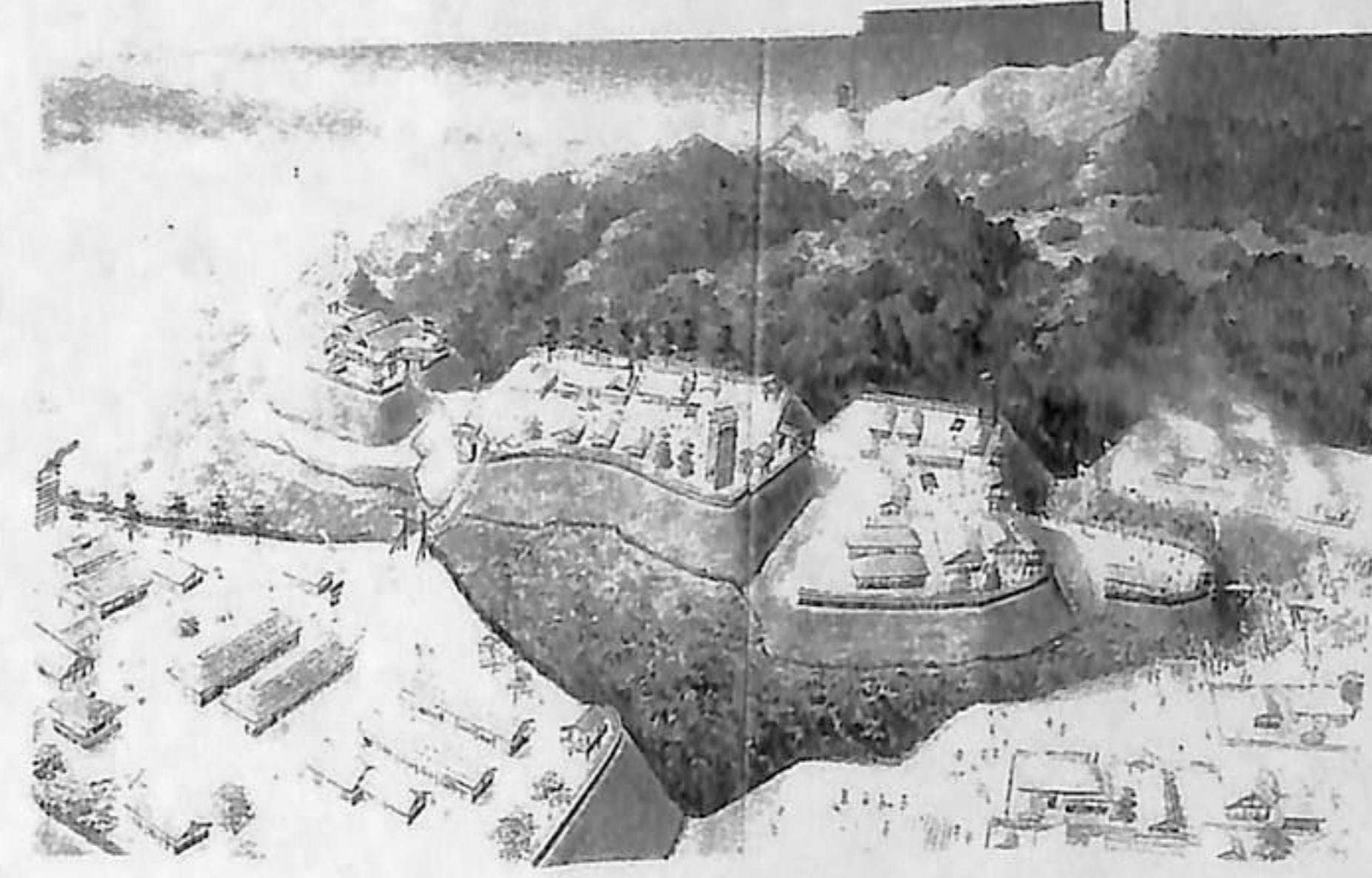
利根川と沼田地区を歩く



整備中名胡桃城



- 分。交通便はよい。沼田平野からは比高50m、一見山城だが高台にある「平城」ということ。
- ② 利根川右岸河岸段丘、急ガケ舌状台地先端に立地、暴れ川の河川敷がこの平野を拓いたのだろうか。この城と関係深い沼田城は対岸南東5km、現況は旧城下を俯瞰するが城跡はみえない。
- ③ 般若郭の専用駐車場で降車。般若郭は室町時代の名胡桃三郎館址とされるが遺構は明確でない。名胡桃城主郭連郭式縄張りを谷一本挟んだ台地上に掘切りされている。長さ85m、幅56m、城内で一番大きい。発掘調査の結果、周囲に柵列を回した溝跡、通路に24棟の掘っ立て柱建物跡を検出、真田氏時代の根小屋地区で上級侍屋敷地と考えられる。
- ④ 般若郭掘切り＝周囲の急ガケ、天然の要害を確認。堀底道はガケ下に繋がっている。外郭＝城の真ん中を国道17号線が通りぬける。道路から先は平坦地で「外郭」、その先に城に付随する城下町的空間が続く。発掘調査は主郭部分だけ、大手筋などの詳細は解明されていない。
- ⑤ 名胡桃城址案内所＝説明資料やVTRなど。トイレと資料見学20分、案内所前に集合
- ⑥ ガイダンス＝「連郭式縄張り」の主郭部を遠望。みなかみ町教育委員会史跡看板＝群馬県指定史跡名胡桃城址 名胡桃城址全体図、名胡桃城関係年表、周辺城跡分布図、発掘調査概要図、全体復元想像図など。ここ名胡桃城は群雄割拠の戦国時代を勇猛に駆け抜けた真田昌幸が築いた上野国利根郡の山城で、10年ほどの歴史にもかかわらずここを舞台とした小さな事件が乱世を終わりに向かわせることになりました。この時期の利根沼田地方は上杉氏、武田氏、北条氏による争いが繰り返られていましたが、天正7年ごろ真田昌幸が吾妻方面から進出し「境い目の城」として名胡桃城を築き、翌年沼田城を手中に納めました。天正17年豊臣秀吉は北条氏政、氏直親子と真田昌幸による北毛地域の領地争いを裁定しましたが、同年真田領に残された名胡桃城を北条氏の家臣が攻略してしまいました。それをきっかけに翌年、豊臣秀吉は小田原北条氏を滅ぼし、事実上、天下統一を果たしたのです。その後、名胡桃城は廃城になりました。
- ⑦ 眼下に自然地形の巨大谷。堀底道に馬蹄状の小腰曲輪が続く。谷地から攻め上がるには強力な「横矢」が連続する。
- ⑧ 丸馬出し＝「馬出し」は虎口前面の小さな防御曲輪。普通は左右から入れ、土塁を経由して堀を渡り虎口に入った。三か月堀は武田流「丸馬出し」の典型例、真田氏の城としての特徴をよく現している。一方北条氏は「角馬出し」を得意とした。みなかみ町教育委員会史跡看板＝馬出し。馬出しとは城の出入り口の外側に堀や土塁で作った防御、攻撃施設で、発達し大型化すると出丸とも呼ばれ、とくに大坂城に真田信繁が築いた真田丸が有名です。名胡桃城では3郭虎口の外側に約20mほどの円形の馬出し（三か月堀＝現在は埋まっています）を深さ1.2mの平底掘り、その内側に半円形の小高台を残し馬出しとしています。



復元レイアウト



本丸名胡桃城址跡

⑨3のくるわ=3の丸の意。戦国時代の城は小さな郭を連続させることが多い。細い尾根を掘切ってそれぞれを独立した郭として、一気に攻め込まれないよう工夫している。

みなかみ町教育委員会史跡看板=3の郭(3の丸)

3郭の規模は約64×26mで東西に長い郭です。外郭との間の堀切りは幅12m、深さ5~7mあり、西側の堀底は般若郭との間の殿坂と合流し、北へ伸びています。2郭堀切りで三か月堀が検出されたことから築城当時ここには3郭ではなく馬出しがあったことがわかりました。

⑩2のくるわ=2の丸は主郭部最大の広さで、発掘調査の結果、中央通路に沿って8棟の掘っ立て建物と、周囲の土塁基底部に1mほどの川原石の野づら積み石垣が確認された。

また、南北の虎口の橋脚位置などから2の丸が当初の本丸とも考えられるという。

みなかみ町教育委員会史跡看板=2郭(2の丸)

2郭は約65×50mの台地で西側の縁辺は広く崩壊して波打った形になっています。中央部に広がる建物敷地は周囲より1mほど低く平坦に造成されています。西側、南側、東側には段があり、幅6~7mの土塁基底部が残っています。郭の北側と南側にはそれぞれ特徴的な虎口が確認され、両脇に溝をもつ巾2.5mほどの通路が南北の間を直線で結んでいます。(後略=基底部に石積み。8棟の掘立柱建物群)

みなかみ町教育委員会史跡看板=2郭南虎口

虎口とは防御施設としての出入り口のこと。戸口に虎の口をあてて勇猛さ、危険さを意味しています。この2郭南虎口は2郭の中が直接見えないよう、郭内の建物敷地より一段高い位置に作られています。2郭堀切りは幅11~13m、深さ5.5~7mで堀法面の傾斜は45度、2郭側が55度と角度を変えて作られています。(中略=喰い違い虎口、川原石乱石積み)2郭堀切りは葉研掘りに掘り切れ4本の脚柱による木橋をかけました。

みなかみ町教育委員会史跡看板=2郭北虎口

(前略)特徴は4この礎石による門址のうち1つは石塔の切り石が再利用されています。通路東脇の溝は門をくぐり暗渠廃水とし、本郭堀切りまで伸び溝横から立ち上がる土塁の腰郭には4~6段の自然石による乱積みがみられます。本郭堀切りは幅14~16m、深さ7~9mあり、法面は2郭側の方が20度ほど急傾斜で土塁の左右で変えて大きくクランクする構造になっている。



北台地を囲む丸の台地



2郭南虎口



2郭



2郭堀切り



2郭北虎口

← 本丸の東側を9むす

⑪本くるわ(本丸)=城の中心のこと。戦国時代は根城、実城、本城、1のくるわ、甲の丸などと呼ばれた。本丸内は庭園付きの城主居所で、普通は書院、対面所、数寄屋などが建てられた。中世戦国時代の城は本丸が狭く、多くは天守もなく、建物も掘っ立て柱で、石垣はあったとしても低い。戦国時代の城づくりの様相をよく伝えている。

⑫本丸と次の笹郭から眼下の利根川を窺う。比高50m、切り立つ断崖絶壁が天険の立地を体感する。対岸、真田、北条氏が争奪を繰り返した因縁の沼田市街を遠望、残念だが城はみえない。みなかみ町教育委員会史跡看板=本郭(本丸)

(前略)本郭は長さ約51m、幅約30mの洋梨形ですが、両側の崖面とも大きく崩落してコンクリートで補強されていることから、当時はもっと広がったことがわかります。郭の縁辺には土塁の基底部分が残っていて土塁が回っていました。この城に天守はなく、本郭内の虎口や建物の状況はわかっていません。

⑬みなかみ町教育委員会史跡看板=ささ郭

笹郭とは城の主体となる本郭が外に対してむき出しにならないように設けた郭で唯一この城跡に残存する土塁を両側に持つ狭長な通路でした。笹郭の先端側には袖郭と物見が続き尾根伝いに下方に通じていました。笹郭は長さ31mで中央には約1m掘りこんだ幅1mほど盛り上げた土塁で挟んでいました。先端には自然石を3~4段乱雑に積んだ石積みが見られ、本郭との間は幅約12m、深さ約6mの堀切りで区画され巾1mほどの狭い土橋で連結されていました。

⑭再びバスに戻り、最後の見学地沼田城めざす。別資料参照。ご案内は保科講師です。

以上

この城は、ささ郭・本郭・二郭・三郭等の主要部が直線に並んだ連郭式の山城で、各郭は堀切でそれぞれ分断され、周囲は急な崖や石積をもつ土塁・櫓・櫓で守られていました。二郭と般若郭の通路脇には三時期に別れて掘立柱建物群が建てられ、各虎口には門を設け、堀切には木橋や喰い違いの造りがみられます。武田氏がよく用いた丸馬出が時期別に二か所で確認され、三郭は後で増築したことがわかりました。

☆ 説明板10基
 ■ 木橋2カ所
 ■ 門柱表示
 □ 建物址表示
 ■ 土塁復元
 ■ 土塁植栽表示
 ■ 橋・階段表示
 ■ 通路表示
 ■ 三日月堀(第一期)
 □ 馬出表示(第二期)

二郭北虎口
 礎石の北門と本郭堀切に架けた木橋を両手に通り、土塁上から横矢を掛けられる出入口です。

二郭
 周囲を土塁で囲い南北の門を直に結ぶ通路には、大小様々な建物群が並びます。

二郭南虎口
 二郭堀切は左右の堀が幅半分、喰い違い、木橋から南門をつなぐ出入口で横矢掛りになっています。

三郭
 第一期の三日月堀による丸馬出を埋め立て、第二期は三郭に改築されました。

ささ郭
 本郭の前に付けられた郭で、両側に石積をもつ土塁・先端には礎石の門が残ります。

般若郭
 通路の両側には二十軒ほどの建物群があり、周囲を櫓や櫓で囲った郭の郭です。

馬出
 第二期に造られた丸馬出で、三郭及び外郭との間には木橋が架けられました。

水の手